

## 臨地実習指導における看護系大学教員の教師効力測定尺度の開発

清水 暁美<sup>1)</sup>，出井 涼介<sup>2)</sup>，太湯 好子<sup>3)</sup>，中嶋 和夫<sup>4)</sup>

### 抄 録

本研究は、臨地実習指導に携わる教員の教育力の解明に資する基礎資料を得ることをねらいとして、臨地実習指導に関連した教師効力を測定する尺度の開発を目的とした。調査対象は、看護系大学で臨地実習指導を担当している教員とし、調査内容は性別、年齢、教員経験年数、職位などを基本属性とするとともに、教師効力を測定するために必要な17項目を用いて構成した。統計解析では、調査項目に欠損値を有さない424人のデータを用い、探索的因子分析により因子の抽出を試み、次いで抽出された因子から構成される測定尺度の構成概念妥当性を確認的因子分析で検討した。探索的因子分析では「カンファレンスを進める自信」「実習指導を行う自信」「学生を尊重する自信」「看護実践ができる自信」が抽出された。それらの因子を第一次因子、「教師効力」を第二次因子とする4因子二次因子モデルはデータに適合したことから、本研究で開発した教師効力測定尺度の構成概念妥当性が統計学的に支持された。今後は、構成概念妥当性の交差妥当性を重ねていく必要がある。

This study aimed to develop a scale to measure teachers' efficacy by obtaining basic data that would clarify teachers' competence as educators in clinical training and guidance. The survey contents comprised items regarding basic attributes, such as gender and age, nursing education and training received, job title and so. For the analysis, we used the data of 424 teachers who had no missing data on the survey items and extracted factors using exploratory factor analysis. Then, with the extracted factors, we examined the construct validity of the measurement scale using confirmatory factor analysis. The exploratory factor analysis resulted in the extraction of the following factors: *confidence to hold conferences*, *confidence in practical nursing*, *confidence to respect students*, and *confidence to conduct training and guidance*. With these factors as the primary factors and *teacher efficacy* as the secondary factor, a secondary factor model 4 factors proved to be acceptable in terms of its goodness of fit. Thus, the construct validity of the teacher efficacy scale developed in this study was statistically supported. In the discussion, we described its benefits to clinical training.

キーワード：看護系大学教員、教師効力、尺度開発、臨地実習指導

Key words : Nursing faculty Teacher efficacy Scale development Clinical training guidance

### I. 緒言

看護基礎教育における臨地実習は、カリキュラムの約1/3の時間数を占め、看護実践能力を身につけるための

重要な学習の場となっている。従って、臨地実習指導を担当する看護系大学教員（以下教員とする）には、学生の行動や学習状況を把握し、臨床の場における学生の看護実践に関する指導を行うといった指導力が問われる。そして、教員の指導力には、それまでの臨床経験はもちろんであるが、実習指導に対する教員の持つ自信、さらに臨地実習という状況の中で遭遇する問題の対処に関連する自己効力感（self-efficacy）からの影響が無視できないのではないかと考える。このうちの自己効力感についてBanduraは、「自分は、一定の結果を生じる行為を遂行できるという本人の信念あるいは期待感」と定義し、社会的学習理論の中核となる概念として位置づけている<sup>1)</sup>。彼は社会的学習理論のなかで、人、行動、環境

1) Akemi Shimizu

吉備国際大学大学院保健科学研究科博士（後期）課程

2) Ryosuke Dei

岡山県立大学大学院保健福祉学研究科

3) Yoshiko Futoyu

吉備国際大学保健医療福祉学部

4) Kazuo Nakajima

両備ヘルシーケア介護福祉研究所

の相互関係について触れ、自己効力感の概念を提唱した。その後、自己効力感の概念が、教師教育の分野にも用いられるようになり、それは「教師効力 (teacher's sense of efficacy or teacher efficacy)」と呼称され、教師効力は教員の実践力を説明したり予測することに有効な概念となっている。従来の研究によれば、教師効力を測定する尺度として、Gibson & Dembo<sup>2)</sup>、Woolfolk & Hoy<sup>3)</sup>、Emmer & Hickman<sup>4)</sup> の研究があり、Guskey<sup>5)</sup> や Woolfolk & Hoy<sup>6)</sup> によると、教師効力が高い教員は授業に熱心で、指導困難な生徒に粘り強く指導するとされている。日本では、Gibson & Dembo<sup>7)</sup> の尺度を桜井<sup>8)</sup> によって翻訳したものや、Woolfolk & Hoy<sup>9)</sup> らの尺度を前原<sup>10)</sup> が翻訳したものが使用されている。なお、看護教育における教師効力についてみるならば、Nugent<sup>ら</sup><sup>11)</sup> による米国の看護教師の教師効力測定尺度がある。日本においては、坪井<sup>ら</sup><sup>12)</sup> の看護系大学の助手を対象として開発した教師効力尺度があるが、その他にはほとんど見当たらない。その教師効力の測定尺度は、測定内容を看護教育全般と実習教育の側面から検討されているものの、任意性の高い探索的因子分析による内容的妥当性の吟味にとどまっており、概念的の一次元性の側面からみた構成概念妥当性が確認的因子分析によって吟味されたものではない。別言するなら、測定尺度の概念的の一次元性 (項目の概念的加算性) に問題を残している。

本研究は、直接臨地実習指導に携わる教員の教育力の解明に資する基礎資料を得ることをねらいとして、臨地実習指導に関連した教師効力を測定する尺度の開発を目的とした。

## Ⅱ. 研究方法

### 1. 調査対象および調査方法

調査対象者は、2014年度に開設3年以上を経過している200校の看護系大学において、臨地実習指導を担当している教員2000人とした (各校10人)。

調査方法は、自記式質問調査で、看護系大学の学部長・学科長および責任者に、研究の目的、方法、倫理的配慮などを文書で説明したうえで、学科長に実習指導を担当している教員10人を選定してもらい、質問紙の配布を依頼した。調査対象者には研究の目的、方法、倫理的配慮、などを文書で説明したうえで、質問紙に記入の後、個別にて郵送してもらうように依頼し質問紙を回収した。

調査期間は、2014年5月下旬～7月上旬であった。

### 2. 調査内容

調査内容は対象者の基本属性と教師効力で構成した。そのうちの基本属性は性別、年齢、修了した看護教育課程、看護職経験年数、教員経験年数、職位、所属する大学の種別、付設した病院施設の有無、専門領域、実習指導担当領域で構成した。教師効力については、坪井<sup>ら</sup><sup>13)</sup> による28項目で構成された「教師効力尺度」および臨床実習指導に関する文献<sup>14) - 18)</sup> を参考に、研究者間で項目内容を検討しプレテストを重ねた後、さらに内容を精選し、臨地実習における効果的な実習指導ができる教師の自信に特化した調査項目を選定した。具体的な項目としては、「xa1:カンファレンスは、意見を自由に述べ合う場とする」、「xa2:カンファレンスでは、グループダイナミックスを活用する」、「xa3:カンファレンスは、学生が関心をもつテーマを決め実施する」、「xa4:受け持ち患者の置かれている状況をわかりやすく学生に説明する」、「xa5:学生が実施する看護行為の間違いを、判断する」、「xa6:看護ケアが変更になった時、学生を援助する」、「xa7:学生個々の違いを認め尊重する」、「xa8:学生の考えや能力に敬意と信頼を示す」、「xa9:学生が自分の気づきを表出するまで待つ」、「xa10:必要時、学生と個別に面接を行う」、「xa11:実習記録を臨地での指導に活用する」、「xa12:事前に実習病棟の特徴を捉え、実習調整を行う」、「xa13:事前に、実習指導計画を立案する」、「xa14:実習の目的・目標にあった受け持ち患者を選ぶ」、「xa15:実習の目的・目標をもとに、実習評価を行う」、「xa16:実習意欲を高めるような問いかけをする」、「xa17:専門職としての態度や能力が学べるように、学生の意欲を刺激する」の計17項目で作成した。各項目の回答と得点化については「0点:できていない」、「1点:どちらかといえばできていない」、「2点:どちらかといえばできている」、「3点:できている」の4件法とし、得点が高いほど回答者の教師効力が高いことを示すように設定した。

### 3. 倫理的配慮

看護系大学の学部長・学科長および責任者に、研究の目的、方法、倫理的配慮、などを文書で説明した後、学科長に実習指導を担当している教員を10人選出してもらうよう文書で依頼した。選出された教員には、研究の趣旨、参加は自由意思であり、回答内容や調査協力が得られないことで不利益を受けないこと、得られたデータの匿名性と本研究のみに使用することを文書で説明し、記入された質問紙を個別で封書による返信を持って本研

究への同意を得たとした。尚、本研究は福山平成大学看護学部倫理審査委員会で承認を得た（承認番号：25-19）。

#### 4. 分析方法

統計解析では、まず、冗長性の高い項目を削除することを目的に項目分析を実施した。具体的には17項目間の多分相関係数を算出し、その値が0.8を上回る項目ペアの一方を削除するものとした。次に、前記項目分析の結果残された項目を用いて探索的因子分析を実施し、固有値の変動状況と適合度指標（Root Mean Square Error of Approximation：RMSEA）、因子負荷量、因子の解釈可能性を参考に最終的な因子とその所属項目を決定した。なお、固有値の変動状況についてはカイザー基準を用い、因子負荷量についてはいずれかの因子に0.3以上を示す項目を因子に所属する項目として採用するものとした。ただし、2つ以上の因子に0.3以上の因子負荷量を示す項目およびいずれの因子にも0.3以上を示さない項目は削除するものとした。また、探索的因子分析では、promax回転を採用し、推定法については重み付け最小二乗法の拡張法（WLSMV）<sup>19) 20)</sup>を用いた。その後、前述の探索的因子分析で得られた結果を基礎に、教師効力測定尺度の因子構造の側面から見た構成概念妥当性を確認的因子分析（推定法：WLSMV）で検討した。なお、尺度の信頼性は、内的整合性の観点からMcDonaldの $\omega$ 信頼性係数<sup>21) 22)</sup>により検討した。

前述した確認的因子分析による因子構造モデルのデータへの適合性の判定には、標本数や観測変数の数に影響されにくい適合度指標Comparative Fit Index：CFIならびにRMSEAを採用した。一般的にCFIは0.90以上<sup>23)</sup>、RMSEAは0.08以下<sup>24)</sup>であればそのモデルは適合しても大きな問題はないと判断される。また、因子構造モデルの標準化推定値（パス係数）の有意性は、非標準化推定値を標準誤差で除いた値を参考とし、その絶対値が1.96以上（5%有意水準）を示したものを統計学的有意とした。以上の解析には、IBM SPSS Statistics 21とMplus 7.11を使用した。

### Ⅲ. 結果

#### 1. 対象者の属性等の分布

本研究では、最終的に1960人の調査票配布数に対し、499人の教員より回答を得た（回収率25.5%）。ただし、統計解析にはこれらのデータのうち分析に必要なすべての調査項目に欠損値を有さない424人分のデータ（有効

回答率85.0%）を使用した。

対象者の属性等の分布を表1に示した。教員424人の属性分布の内訳は、「男性」36人（8.5%）、「女性」388人（91.5%）であり、「年齢」は平均45.2歳（標準偏差9.19）であった。修了している看護教育課程は「大学院修士課程」が290人（68.4%）と最も多く、次いで「看護系大学（編入含む）」が123人（29.0%）であった。「看護師としての臨床経験年数」は平均8.7年（標準偏差7.94）、「保健師としての臨床経験年数」は平均0.5年（標準偏差2.29）、「助産師としての臨床経験年数」は平均1.8年（標準偏差4.51）であった。「看護系大学での教員経験年数」は平均6.9年（標準偏差4.99）、「看護系専門学校での教員経験年数」は平均1.8年（標準偏差4.35）、「看護系短期大学での教員経験年数」は平均0.9年（標準偏差2.71）であった。現在の職位については「助教」が152人（35.8%）と最も多く、次いで「講師」が96人（22.6%）であった。所属大学の種別については「私立」が250人（59.0%）と過半数を占めていた。付設している病院施設については「ある」と回答した者が174人（41.0%）、「ない」と回答した者が250人（59.0%）であった。専門領域につ

表1 分析対象者の属性等の分布（n=424）

		単位：人（%）	
性別	男性	36	（ 8.5 ）
	女性	388	（ 91.5 ）
年齢	平均±標準偏差（範囲）	45.2±9.19歳	（ 27-78 ）
	看護専門学校	108	（ 25.5 ）
修了看護教育課程 （複数回答）	看護系短期大学	56	（ 13.2 ）
	看護系大学（編入含む）	123	（ 29.0 ）
	大学院修士課程	290	（ 68.4 ）
	大学院博士課程	92	（ 21.7 ）
臨床経験年数（看護師）	平均±標準偏差（範囲）	8.7±7.94年	（ 0-42 ）
	平均±標準偏差（範囲）	0.5±2.29年	（ 0-26 ）
教員経験年数（看護系大学）	平均±標準偏差（範囲）	6.9±4.99年	（ 0-24 ）
	平均±標準偏差（範囲）	1.8±4.35年	（ 0-34 ）
現在の職位	平均±標準偏差（範囲）	0.9±2.71年	（ 0-19 ）
	教授	59	（ 13.9 ）
所属大学種別	准教授	78	（ 18.4 ）
	講師	96	（ 22.6 ）
	助教	152	（ 35.8 ）
	助手	39	（ 9.2 ）
附属病院施設	国立	82	（ 19.3 ）
	公立	89	（ 21.0 ）
	私立	250	（ 59.0 ）
	その他	3	（ 0.7 ）
専門領域 （複数回答）	ある	174	（ 41.0 ）
	ない	250	（ 59.0 ）
実習指導担当領域 （複数回答）	基礎看護学	84	（ 19.8 ）
	成人看護学	125	（ 29.5 ）
地域看護学	老年看護学	46	（ 10.8 ）
	精神看護学	44	（ 10.4 ）
在宅看護学	在宅看護学	20	（ 4.7 ）
	母性看護学	78	（ 18.4 ）
小児看護学	小児看護学	47	（ 11.1 ）
	地域看護学	18	（ 4.2 ）
基礎看護学実習	基礎看護学実習	147	（ 34.7 ）
	成人看護学実習	143	（ 33.7 ）
老年看護学実習	老年看護学実習	60	（ 14.2 ）
	精神看護学実習	43	（ 10.1 ）
在宅看護学実習	在宅看護学実習	34	（ 8.0 ）
	母性看護学実習	72	（ 17.0 ）
小児看護学実習	小児看護学実習	49	（ 11.6 ）
	地域看護学実習	20	（ 4.7 ）

表2 教師効力に関する項目の回答分布 (n=424)

		回答カテゴリ				単位：人 (%)
項目		できていない	どちらかといえば できていない	どちらかといえば できている	できている	
※						
xa1	カンファレンスは、意見を自由に述べ合う場とする	2 ( 0.5 )	64 ( 15.1 )	257 ( 60.6 )	101 ( 23.8 )	
xa2	カンファレンスでは、グループダイナミックスを活用する	2 ( 0.5 )	106 ( 25.0 )	237 ( 55.9 )	79 ( 18.6 )	
xa3	カンファレンスは、学生が関心をもつテーマを決め実施する	9 ( 2.1 )	71 ( 16.7 )	226 ( 53.3 )	118 ( 27.8 )	
xa4	受け持ち患者の置かれている状況をわかりやすく学生に説明する	3 ( 0.7 )	46 ( 10.8 )	273 ( 64.4 )	102 ( 24.1 )	
xa5	学生が実施する看護行為の間違いを、判断する	5 ( 1.2 )	41 ( 9.7 )	256 ( 60.4 )	122 ( 28.8 )	
xa6	看護ケアが変更になった時、学生を援助する	1 ( 0.2 )	16 ( 3.8 )	234 ( 55.2 )	173 ( 40.8 )	
xa7	学生個々の違いを認め尊重する	② 0 ( 0.0 )	15 ( 3.5 )	240 ( 56.6 )	169 ( 39.9 )	
xa8	学生の考えや能力に敬意と信頼を示す	0 ( 0.0 )	33 ( 7.8 )	264 ( 62.3 )	127 ( 30.0 )	
xa9	学生が自分の気づきを表出するまで待つ	7 ( 1.7 )	104 ( 24.5 )	254 ( 59.9 )	59 ( 13.9 )	
xa10	必要時、学生と個別に面接を行う	2 ( 0.5 )	16 ( 3.8 )	174 ( 41.0 )	232 ( 54.7 )	
xa11	実習記録を臨地での指導に活用する	2 ( 0.5 )	29 ( 6.8 )	209 ( 49.3 )	184 ( 43.4 )	
xa12	事前に実習病棟の特徴を捉え、実習調整を行う	1 ( 0.2 )	27 ( 6.4 )	213 ( 50.2 )	183 ( 43.2 )	
xa13	事前に、実習指導計画を立案する	42 ( 9.9 )	128 ( 30.2 )	172 ( 40.6 )	82 ( 19.3 )	
xa14	実習の目的・目標にあった受け持ち患者を選ぶ	12 ( 2.8 )	88 ( 20.8 )	238 ( 56.1 )	86 ( 20.3 )	
xa15	実習の目的・目標をもとに、実習評価を行う	2 ( 0.5 )	15 ( 3.5 )	217 ( 51.2 )	190 ( 44.8 )	
xa16	学習意欲を高めるような問いかけをする	① 1 ( 0.2 )	48 ( 11.3 )	280 ( 66.0 )	95 ( 22.4 )	
xa17	専門職としての態度や能力が学べるように、学生の意欲を刺激する	2 ( 0.5 )	56 ( 13.2 )	254 ( 59.9 )	112 ( 26.4 )	

※① 多分相関係数が0.878を示したため削除

※② 探索的因子分析の結果、二つ以上の因子に対して因子負荷量が0.3以上を示したため削除

表3 教師効力測定尺度の探索的因子分析の結果

因子名	項目	因子負荷量			
因子Ⅰ カンファレンス を進める自信	ya1	0.947	-0.138	-0.042	0.080
	ya2	0.828	0.186	-0.039	-0.079
	ya3	0.515	0.015	0.146	-0.028
	ya10	-0.082	0.698	0.195	-0.107
	ya11	-0.054	0.681	0.071	0.019
因子Ⅱ 実習指導を行う 自信	ya12	-0.043	0.826	-0.128	0.092
	ya13	-0.044	0.579	-0.009	-0.044
	ya14	0.043	0.581	-0.123	0.120
	ya15	0.096	0.730	-0.114	0.041
	ya17	0.151	0.391	0.214	0.090
因子Ⅲ 学生を尊重する 自信	ya8	0.015	-0.088	0.977	-0.056
	ya9	0.129	0.169	0.418	-0.060
因子Ⅳ 看護実践が できる自信	ya4	0.119	0.144	0.066	0.577
	ya5	0.043	0.074	-0.091	0.812
	ya6	-0.079	0.075	0.134	0.756
	ya7 (削除)	-0.093	0.008	0.747	0.305
固有値		6.501	1.668	1.299	1.104
因子寄与率 (%)		40.6	10.4	8.1	6.9
RMSEA		0.052			
因子間相関		1.000			
		0.475	1.000		
		0.489	0.518	1.000	
		0.345	0.562	0.441	1.000



いては「成人看護学」と回答した者が125人（29.5%）と最も多く、実習指導担当領域については「基礎看護学実習」と回答した者が147人（34.7%）と最も多かった。

## 2. 教師効力測定尺度の妥当性・信頼性の検討

教師効力に関する17項目の回答分布を、表2に示した。集計対象424人分のデータを用いて、教師効力に関する項目間の多分相関係数を算出した。その結果「xa16」と「xa17」の項目ペア間において相関係数0.8以上の値が示されたため、内容を吟味し「xa16」について尺度を構成する項目から削除した。その後、残された16項目を用いて、探索的因子分析を行ったところ、固有値の変動状況、適合度指標、因子の解釈可能性から4因子が抽出された（表3）。なお、複数の因子に対して因子負荷量が0.3以上を示した「ya7」については尺度を構成する項目から削除した。因子Ⅰは「ya1」や「ya2」などが所属しており、xa1「カンファレンスは、意見を自由に述べ合う場とする」、xa2「カンファレンスでは、グループダイナミックスを活用する」、xa3「カンファレンスは、学生が関心をもつテーマを決め実施する」の3項目で構成されることから「カンファレンスを進める自信」と解釈できた。因子Ⅱは「ya12」や「ya15」などが所属しており、xa10「必要時、学生と個別に面接を行う」、xa11「実習記録を臨地での指導に活用する」、xa12「事前に実習病棟の特徴を捉え、実習調整を行う」、xa13「事前の目的・目標にあった受け持ち患者を選ぶ」、xa15「実習の目的・目標をもとに、実習評価を行う」、xa17「専門職としての態度や能力が学べるように、学生の意欲を刺激する」の7項目で構成されることから「実習指導を行う自信」と解釈できた。因子Ⅲは「ya8」と「ya9」が所属しており、xa8「学生の考えや能力に敬意と信頼を示す」、xa9「学生が自分の気づきを表出するまで待つ」の2項目で構成されていることから「学生を尊重する自信」と解釈できた。因子Ⅳは「ya5」や「ya6」などが所属しており、xa4「受け持ち患者の置かれている状況をわかりやすく学生に説明する」、xa5「学生が実施する看護行為の間違いを、判断する」、xa6「看護ケアが変更になった時、学生を援助する」の3項目で構成されていることから「看護実践ができる自信」と解釈できた。

以上の結果を基に、計15項目で構成される教師効力測定尺度の4因子二次因子モデルの因子構造の側面から見た構成概念妥当性を確認的因子分析により検討した

ところ、適合度指標は $\chi^2 = 224.302$ 、 $df = 86$ 、 $CFI = 0.967$ 、 $RMSEA = 0.062$ であった（図1）。変数間の関連性に着目すると、因子構造モデルにおいて仮定した関連性はすべて統計学的に有意な関連性を示していた。このときの第二次因子から第一次因子に対するパス係数、第一次因子から観測変数へのパス係数はいずれも正值であり、具体的には、第二次因子から第一次因子へのパス係数は609－891の範囲にあった。第一次因子から観測変数への具体的なパス係数は、「カンファレンスを進める自信」は0.609－0.935、「実習指導を行う自信」は0.494－0.756、「学生を尊重する自信」は0.675－0.702、「看護実践ができる自信」は0.779－0.822の範囲にあった。また、教師効力測定尺度の信頼性を $\omega$ 信頼性係数で検討したところ、値は0.844であった。なお、下位因子毎の信頼性係数については「カンファレンスを進める自信」が0.746、「実習指導を行う自信」が0.773、「学生を尊重する自信」が0.640、「看護実践ができる自信」が0.755であった。

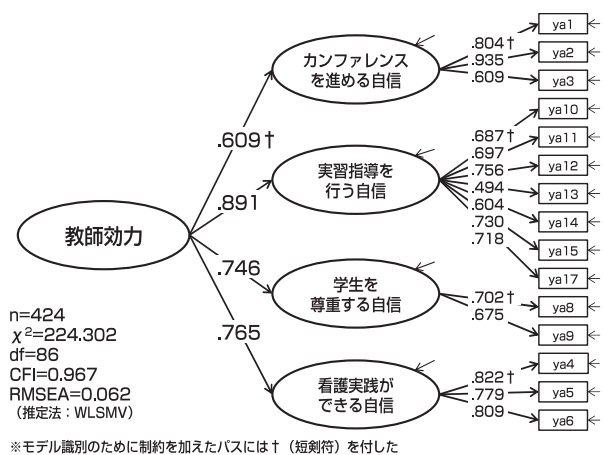


図1 教師効力測定成尺度の確認的因子分析結果

## IV. 考察

本研究は、直接臨地実習指導に携わる教員の教育力の解明に資する基礎資料を得ることをねらいとして、臨地実習指導に関連した教師効力を測定する尺度の開発を目的に行った。本研究では構造方程式モデルを用いた確認的因子分析に必要なサンプルは確保できたが、探索的な因子分析におけるサンプル数がやや少ないことは否めない。しかし、全国規模で看護系大学の教員のデータが得られたこと、また職層において臨地実習指導を担当する助手に限定せず、他のすべての職層で直接臨地実習指導に携わっている教員をサンプルとしたことは評価できると考える。また統計解析では、探索的因子分析に先立

ち冗長性の高い項目を、4件法のデータは厳密には質的データであることを考慮して多分相関係数を基礎に削除したこと、また探索的因子分析も回転法にpromax回転、推定法にWLSMVを採用し因子の抽出を試みたことも評価できると考える。なお、信頼性の検討には $\omega$ 信頼性係数を算出したが、データがカテゴリカルであることを考慮するなら適切な選択であったと推察される。

その結果、探索的な因子分析においては4因子を抽出することができた。それらは「カンファレンスを進める自信」、「実習指導を行う自信」、「学生を尊重する自信」、「看護実践ができる自信」と命名されたが、助手を対象としたデータから抽出された坪井ら<sup>25)</sup>による研究の7因子に大きく矛盾するものではなかった。

次いで本研究では前記の4因子を第一次因子、臨地実習指導に関連する「教師効力」を第二次因子とする二次因子モデルが、データに適合することを明らかにした。このことは、15項目4因子で構成される測定尺度の構成概念妥当性が統計学的に支持された。つまり、概念的一次元性を備えた測定尺度が開発できたことを意味する。信頼性係数も適切な範囲にあり、数量的な加算性も統計学的に支持されたといえる。また一方で本研究の結果は、Banduraの提唱する自己効力理論の要素である効力感という概念が否定できないことを意味しており、その規定要因やインパクトをより適切に明らかにするうえで、意義深い結果といえる。

心理尺度は、ある概念（変数）について安定した測定結果を得るために、高い妥当性と信頼性を兼ね備えていることが肝要である。また、目的とした概念を安定して測定できることは概念と概念の関係性を実証的に検討する上で重要な要件の一つである。本研究で検討した構成概念妥当性は、基準関連妥当性と内容的妥当性を含む上位概念であり、高い妥当性を持つ心理尺度は必然的に高い信頼性を兼ね備えている<sup>26)</sup>。その意味では、本研究において教師効力測定尺度の構成概念妥当性が支持されたことは、妥当性と信頼性を兼ね備えた尺度であると言える。本研究で開発された教師効力測定尺度を用いることにより、教員の教師効力を向上させるための要因を解明することや、また、教師効力が教員の特性や能力に及ぼす影響、臨地実習指導における教員の指導力との関連性等を明らかにすることを企図した研究に一定の貢献をもたらすことが期待できる。更に、本研究のような知見の蓄積が、今後のわが国における看護系大学の臨地実習指導における教育の質の向上や、より一貫した体系化に寄与できるものと確信している。

## V. 結語

本研究において、臨地実習指導に関連した教師効力を測定する尺度が開発できた。本尺度は臨地実習における教師の評価やその関連要因を検討する上で有益な道具となることが推察された。そのためにも、一方では、構成概念妥当性の交差妥当性を重ね、他方では、臨地実習の重要性を鑑みるなら、関連職員の教師効力に関連する関連要因の解明を急ぐことが今後の課題である。

## 文献

- 1) Bandura, A : Self-efficacy : Toward a unifying theory of behavioral change. Psychological Review, 84. 191-215, 1997
- 2) Gibson & Dembo, M.H. : Teacher Efficacy : A Construct validation, Journal of Educational Psychology, 76 (4) ,569-582 , 1984
- 3) Woolfolk, A. E. & Hoy, W. K. : Prospective Teachers' Sense of Efficacy and Beliefs About Control, Journal of Educational Psychology, 82 (1) ,81-91, 1990
- 4) Emmer & Hickman : Teacher Efficacy in Classroom Management and Discipline, Educational & Psychological Measurement, 51, 755-765, 1991
- 5) Guskey, T. R. : The influence of change in instructional effectiveness upon the affective characteristics of teachers. American Educational Research Journal, 21, 245-259, 1984
- 6) 前掲書 3)
- 7) 前掲書 2)
- 8) 桜井茂男 : 教育学部生の教師効力感と学習理由, 奈良教育大学教育研究所紀要, 28, 91 - 98 , 1992
- 9) 前掲書 3)
- 10) 前原武子 : 教師の効力感と教師モラル, 教師ストレス, 琉球大学教育学部紀要, (44), 333 - 342, 1994
- 11) Nugent KE & Bradshaw MJ & Kito N : Teacher self-efficacy in new nurse educators, Journal of Professional Nursing, 15 (4) ,229-37, 1998
- 12) 坪井桂子, 安酸史子 : 看護系大学教師の実習教育に対する教師効力尺度の検討, 日本看護科学雑誌, 21 (2), 37 - 45, 2001
- 13) 前掲書 12)
- 14) 山田聡子, 太田勝正 : 看護教員が期待する臨地実習指導者の役割 フォーカスグループインタビュー

- に基づく検討, 日本看護学教育学会誌, 20巻2号, 1-11, 2010
- 15) 松谷美和子: 看護学士号を持つ新人看護師に求められる臨床実践能力の開発のための学習モデルの研究, 科学研究費助成事業研究報告書, 2014
- 16) 椎葉美千代, 斎藤ひさ子, 福澤雪子: 看護学実習における実習指導者と教員の協働に影響を与える要因, 産業医科大学紀要32 (2), 161 - 176, 2010
- 17) 詰坂 悦子: 臨地実習指導者の看護教員との連携に関する意識調査, 看護教育研究集録. Reports of nursing research (36) , 72-79, 2010
- 18) 舟島なをみ監修: 看護実践・教育のための測定用具ファイル 第2版, 医学書院, 2009, 東京
- 19) Muthén, L.K., and Muthén, B.O.: Mplus User's Guide. Seventh Edition. Los Angeles, CA.2012
- 20) 小杉考司・清水裕士: 『M-plusとRによる構造方程式モデリング入門』 北大路書房, 2014, 東京
- 21) McDonald, R.P.: Test Theory; A Unified Treatment. Psychology Press, Mahwah, NJ.1999
- 22) 豊田秀樹編: 『共分散構造分析[疑問編]—構造方程式モデリング—』 朝倉書店, 2003, 東京
- 23) 小塩真司: 『はじめての共分散構造分析—Amosによるパス解析』 東京図書, 2008, 東京
- 24) 山本嘉一郎, 小野寺孝義: AMOSによる共分散構造分析と解析事例 (第2版), ナカニシヤ出版, 2002, 東京
- 25) 前掲書12)
- 26) 村上宣寛: 『心理尺度のつくり方』 北大路書房, 2006, 東京

# **A Study on Measuring Teacher Efficiency for Nursing Faculty Members’ Clinical Training and Guidance**

Akemi Shimizu<sup>1)</sup>, Ryosuke Dei<sup>2)</sup>, Yoshiko Futouy<sup>3)</sup>, Kazuo Nakajima<sup>4)</sup>

## **Abstract**

This study aimed to develop a scale to measure teachers’ efficacy by obtaining basic data that would clarify teachers’ competence as educators in clinical training and guidance. The survey contents comprised items regarding basic attributes, such as gender and age, nursing education and training received, job title and so. For the analysis, we used the data of 424 teachers who had no missing data on the survey items and extracted factors using exploratory factor analysis. Then, with the extracted factors, we examined the construct validity of the measurement scale using confirmatory factor analysis. The exploratory factor analysis resulted in the extraction of the following factors: *confidence to hold conferences*, *confidence in practical nursing*, *confidence to respect students*, and *confidence to conduct training and guidance*. With these factors as the primary factors and *teacher efficacy* as the secondary factor, a secondary factor model 4 factors proved to be acceptable in terms of its goodness of fit. Thus, the construct validity of the teacher efficacy scale developed in this study was statistically supported. In the discussion, we described its benefits to clinical training.

Key words : Nursing faculty Teacher efficacy Scale development Clinical training guidance